



新潟県の蔵元に生まれ、左目の女性を描いた宮尾登美子さんの小説『蔵』に、こんな言葉がある。「泡を見りゃ、もうみの年を当てるちゅうんが杜氏の自慢ですけど」

日本酒づくりの最高責任者が杜氏だ。イギリス人のフィリップ・ハーバーさん(43)は、2007年から京都府京丹後市の「木下酒造」で杜氏を務めていた。この世界に入ってから18年。オックスフォード大を出て1988年、英語教師として来日したハーバーさんは、日本酒のおいしさにひかれ、3年後奈良県の蔵に入った。そこで出会ったのは兵庫縣但馬出身の杜氏や蔵人たち。冬、農家から蔵へやって来て、寝食をともに

知恵の伝承

しながら酒をつくる。「杜氏を中心に、良い酒をつくるために力を合わせていく世界がとても魅力的でした。その日の天候や気温、風の向きによつて、一つの工程を微妙に変化させ、発酵の進み具合を調節する。経験と勘が必要だ。」

「経験がないと勘も出てこない」は、ハーバーさんが杜氏から教わった言葉だ。「頭ではわかっていても実際、経験してみないとわからない」

1965年度、全国で3663人いた杜氏は、07年度には839人まで減り、高齢化も進む。しかし、彼らが伝えているのは長年の経験に裏打ちされた老練の技だ。ハーバーさんが学んできたのは、日本人が忘れかけようとしている知恵の伝承なのかも知れない。

編集委員 小牧瑠子